皮膚科治療薬の使い分け

NTT東日本関東病院皮膚科部長
五十嵐　敦　之
（聞き手　池田志孝）

皮膚科治療にて軟膏、クリーム製剤およびワセリン（白色、サリチル酸、プロペト）の使い方をご教示ください。

＜北海道開業医＞

池田　まず質問の内容から、どのような外用剤があるか、概略をおうかがいしたいと思います。

五十嵐　外用薬と一言に申しましても、いろいろな剤形、例えば軟膏とかクリームとか、あとゲル、ローション、様々な剤形のものがありまして、これらを疾患や部位、患者さんの好み等に応じて使い分けていくわけですけれども、少しここで外用薬はどんなもので成り立っているか、簡単に説明させていただきたいと思います。

外用薬というのは、基剤といいまして、一番大本となるものがあるのです。これが外用薬の90％以上を占めているわけですけれども、これには例えばワセリンとかプラスチベースとかクリームなどがあります。これに主剤といいまして、例えばステロイドだとか抗真菌薬とか、そういう効かせたい成分が入っているわけです。そのほかに、安定剤だとか、腐敗しないための防腐剤とか、主剤の吸収をよくするための吸収促進剤とか、いろいろな添加剤が入っています。

基剤が大事なのでここで申し上げますけれども、基剤は大きく分けて、水をはじく疎水性のものと、水になじむ親水性のもの、２つに分けられます。

疎水性は水をはじくもので、ちょっと考えてみればおわかりのように、油っぽいわけです。これは油脂性の基剤というものでして、基剤の成分の代表的なものにはワセリンとかパラフィンとかプラスチベース、そんなものがあります。

一方、親水性というものは、さらに２つに分かれるのですけれども、一つ

表　基剤とその特徴

分類		基剤成分	浸透性	長所	短所
疎水性	油脂性基剤	ワセリン、パラフィン、プラスチベース	非浸透性	皮膚保護作用、柔軟作用、痂皮軟化脱落作用などに優れる 皮膚刺激性が低い	主剤の経皮吸収性は劣る べとつく
親水性	乳剤性基剤	水中油型基剤（O/W）親水軟膏バニシングクリーム	浸透性	主剤の配合性がよく経皮吸収性に優れる べとつかない 水で洗い流せる	滲出液を患部に再吸収させる 皮膚刺激性
		油中水型基剤（O/W）吸水軟膏コールドクリーム			
	水溶性基剤	マクロゴール（PEG）など	非浸透性	水で洗い流せる 主剤の溶解性や混合性に優れる 滲出液を吸着する	主剤の経皮吸収性は低い

は乳剤性基剤といいまして、簡単にいえばクリームのように水と油がうまく混じり合っているようなものをいいます。

もう一つは水溶性基剤といって、水に溶けるもの、これはマクロゴールなどが代表的な基剤になるのですけれども、こちらはどちらかというと、皮膚の潰瘍とかびらんとか、そういうものの薬の基剤として使われることが多いです。

我々がよく、湿疹とか皮膚炎とかそういうものに使うときには、先ほどの油脂性の基剤と乳剤性の基剤を主に使い分けるわけです（**表**）。

池田　最近はハイテクな軟膏で、油の中に小さなカプセルが入っているようなものが売られているとうかがったのですが、そういったものは従来の単純なワセリンとか、そういったものと混ぜて使ったりということはされないのでしょうか。

五十嵐　特殊な主剤の閉じ込め方で、最近あるのは液的分散型というちょっと特殊なタイプがあるのですけれども、これは混合に不安定といわれています。一般的に我々がよく使うのは、いわゆる軟膏です。これは要するに油っぽいもの。もう一つは先ほど申し上げました乳剤性の中でクリームがあるのです

けれども、この２つを使うことが多いかなと思います。

池田　次に、どうやってそういったものを塗り分けていくのかということについてうかがいたいと思います。

五十嵐　先ほど言いました油脂性の基剤、要するに軟膏ですが、これは一番ポピュラーなもので、どんな皮膚症状にも使うことができるのです。皮膚というのは、乾燥しているところだとか、水疱があるとか、びらんになっているとか、亀裂になっているとか、いろいろな皮膚の症状があるわけですけれども、油脂性の軟膏はどんな皮膚症状にも適応できますから、何か皮膚の疾患を見て薬を出そうというときに、軟膏を出しておけば一番無難なわけです。

軟膏というのは皮膚の保護作用にも優れていますけれども、一番の欠点はべとつくという、患者さんにとっての使用感の問題があります。ここが一番の問題です。

もう一つ、先ほどから何回も出てきますクリームですが、これは水と油の混合物なのですけれども、水と油のどっちが多いかによって２つに分かれていまして、水が多いタイプは親水軟膏、バニシングクリームといいますが、こっちのほうが水が多いですから、さらさら感が強いのです。もう一つの油が多いほうは、吸水軟膏とかコールドクリームとかいいますけれども、こっちのほうが若干油っぽい。ただ、両方ともうまく油が乳化していますので、これらの剤形のものはべとつかないで、水で洗い流せます。そういうことで、患者さんの使用感はいいのです。

ただ、これらの外用薬で注意しなければいけないのは、じゅくじゅくした皮膚病変、要するに滲出液が出てくるような病変、びらんだとか水疱だとか、そういうところに使うのはよくないのです。というのは、病変部から出てきた滲出液というのは、実は外用薬は吸ってあげたほうがいいのですけれども、クリームのものを使うと逆に皮膚のほうにまた戻してしまうようなところがあって、これがよくないのです。

また、もう一つ大きな欠点としては、刺激感がありまして、そういう傷のあるところに塗ったりすると、しみることがあります。そういったことで、使用感はいいのだけれども、使う病変が限られているところがこれらクリーム、乳剤性のものの欠点ということになると思います。

池田　そのほか、ローションタイプもあると思うのですが、それはどういうところに使うのでしょうか。

五十嵐　ローションのタイプ、これは液体のものですから、頭皮などに非常に使いやすいということがあります。ただ、これもものによって刺激感とか、アルコール性のものを基剤としているようなものがあります。傷などがある

としみるので、ちょっと注意が必要かなと思います。

あと、テープ剤などもあるのですが、これは密封療法から発生しているものですけれども、テープで貼ると、密封することによって主剤の透過性がよくなるものですから、慢性の湿疹などにはよく使われると思います。

池田　今、使い方をご教授いただいたのですが、例えば水虫の患者さんがいらっしゃった。開業の先生の質問ですけれども、そういったときにどういったところに軟膏、クリーム、液体を使うのでしょうか。ちょっと具体的な例を挙げていただければと思います。

五十嵐　水虫というのは足の趾の間にできたり、足底にできたりするのですけれども、むれる部位にできるので、患者さんにとってはべとつく剤形のものはあまり好まれないのです。ですから、一般的にはクリーム基剤のものを使ったりとか、先ほどの液剤を使ったりすることが多いのですけれども、ここでちょっとご注意いただきたいのは、趾間型の足白癬、趾の間が非常に白く浸軟したり、じゅくじゅくしたり、こういうところは非常にかぶれを起こしやすいのです。そうすると、クリームとか先ほどの液剤だと刺激があったりして、剤形の選択によってはかえって悪化してしまうようなことがあります。非常に数は少ないのですけれども、足白癬の抗真菌剤の中には軟膏基剤のものがありまして、軟膏基剤はそんなにニーズが多いわけではないのですが、先ほど申し上げたような、じゅくじゅくした足白癬のような場合には軟膏基剤のものを使うのもありだと思います。

池田　具体的に軟膏を使って少し乾いてきた、じゅくじゅく感がなくなってくる。そうしたときには、またクリームにかえたりとかあるのでしょうか。

五十嵐　そうですね。皮膚の病変部の性状が変化してきたら、それに応じて、また患者さんの好み等を考えて変更していくというのが大事だと思います。

池田　水虫の外用薬で液体がありますけれども、これは爪とかに白癬がある場合は頻繁に使われるのでしょうか。

五十嵐　保険の話をすると、今売られている液剤は足白癬にしか適応がなく、爪白癬に適応症を持っている外用薬は今年ようやく登場しますが、実際上は液体のものを爪の白癬に使うことはよくあります。浸透性のことを考えると、クリームよりも液体のほうが爪には浸透しやすいですから、そういった治療をされている先生方が多いのではないかと思います。

池田　かかとが固くなるタイプの白癬がありますね。それはやはり軟膏をつけるのでしょうか。

五十嵐　かかとの角化に関してはいろいろ選択肢があると思うのですけれども、例えば角層を融解するような作

用を持っているサリチル酸のワセリンだとか、あと尿素製剤などを使うこともあります。そういったものである程度やわらかくしてあげたり、場合によってはクリーム基剤のものを使って少しなじませてあげるようなことをしている先生もいらっしゃるかと思います。

池田　最後に、特徴的な外用薬といいますか、先ほどのお話をうかがっていると、商品名と剤形が一致していないようなものがあるとうかがったのですが。

五十嵐　実は日本薬局方の十五局までは外用薬の分類で軟膏の中にクリームが含まれていたものですから、そういったこともありまして、例えばザーネ軟膏、ケラチナミンコーワ軟膏といいながら実はクリームであるといった、ずれが生じたのです。2013年、十六局が出まして、そこのところにクリーム剤の項目もできたので、今後は商品名を見ればどんな剤形なのかがちゃんとわかるように、改正されている状況だろうと思います。

池田　そういう意味では、今後、少し名前が変わる外用剤が出てくるということですね。

五十嵐　ケラチナミンコーワ軟膏は、ケラチナミンコーワクリームに変更になりましたが、今後は商品名から剤形がわかるようになると思います。

池田　いろいろな剤形があるというお話と、足白癬を例に取っていただいて、外用剤の選択の仕方、ある程度症状が変わったら、またかえていく可能性があるということをうかがいました。どうもありがとうございました。